

---

# 証明、君。

紅葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

証明、君。

### 【Nコード】

N5699A

### 【作者名】

紅葉

### 【あらすじ】

江戸川コナンとして生きて10年：自分さえよく解らない。灰原哀を恨んだわけじゃない、宮野志保を好きになったわけでもない。ただ自分を知る人と居たかった。

天才高校生探偵。

人気小説家と元女優の息子。

大嫌いだったそんな言葉ですら、今は恋しい。

なあ、俺は誰なんだ…？

\*\*\*

俺が江戸川コナンになってからもう10年になる。

組織を追い込むでもなく、蘭に正体を明かすでもなく。

虚しく過ぎた時間は確実に俺を工藤新一へと成長させた。

鏡に映るのは懐かしいあの顔。

「これも、ある意味元に戻ったって言うのかね…」

自嘲気味に笑いながら袖を通すいつもの制服は、工藤新一のお下がりでなかった。

「おはようコナン君！」

相変わらず元気のいい歩美に小さく相槌を打つ。  
それだけ。

特に話すこともないから。

“少年探偵団”なんて、  
今では良い思い出。

歩美は中学の時に見つけた気の合う親友と常に行動を共にしているし、光彦や元太も部活に精をあげていた。  
ときどき集まることはあっても、あの頃のように自ら事件に首を突っ込むことなどしない。

今になって、こいつらとの探偵ごっこを楽しんでいた自分に気付く。

（小学生の方が楽だったな…）

ぼんやりとそんな事を考えながら教室に足を踏み入れると、ちょうど廊下に出ようと扉に向かっていたのか、哀と目が合ってしまった。

「…おはよう、江戸川君」

すぐに視線をそらして横を通りすぎる彼女は、いつからか俺を『工

藤君』と呼ばなくなった。

蘭も、疑うことに疲れたのか何も言っていない。

俺は誰だっけ？

工藤新一？

今その名を呼ばれても、反応出来ない気がして怖い。

なんで誰も疑ってくれないんだろう…？

江戸川コナンなんてふざけた名前、あるわけないのに。

＊＊

「貴方いつもここにいるのね」

昼の陽射しが心地好い屋上。

いきなり現れた彼女に驚けば、暖かさからくるまどろみも一瞬で消えてしまった。

屋上を利用する者は意外と少ない、というか俺の貸しきりだった。

「友達いないの？」

クスリと笑う彼女。

その馬鹿にした笑顔が憎らしくて、どうしようもない衝動が胸を渦巻く。

「うるせーな……」

今、彼女は俺の背中を切なさうに見ているんだろうな。きつと。

彼女の謝罪の言葉は嫌というほど聞いた。

別に恨んでるわけでも嫌いになつたわけでもない。だけど。

頼むから、もう俺の前に現れないでくれ。

「江戸川君」

ほら、お前はまたそうやって俺を混乱させるから。

「……」

まるで時間が止まってしまったかのような沈黙。  
頬を撫でる風が止んでしまえば、本当にそんな錯覚に陥りそうだった。

「…俺は工藤新一だよ」

自分に言い聞かせるように低く呟く。

哀は何も言っではくれなかった。

コナンとして生きよう。

そう決めたのはいつだった？ 蘭を諦めきれず、  
組織の悪事を暴くこともできず。

そんな中途半端な道が嫌で嫌で堪らなかったから。逃げ出した。

『…そう、私にこんなことを言う資格はないけど…。  
貴方に逢えて良かったわ』

ふと頭を過ぎった彼女の声。

思えばあの瞬間から、彼女が遠くなった気がする。

工藤新一を放棄した、あの瞬間から。

「…なあ……志保」

口にしたこともなかったその名をいきなり呼んだのは単なる気まぐれ。

その“気まぐれ”に『灰原哀』は目を見張った。

「何よいきなり」

平然を装った声で、うつむいてしまった哀を横目でちらりと覗き見る。

「俺は誰なんだろうな」

それはひどく独り言に似ていて、答えが欲しいのか欲しくないのか自分でもよく判らなかった。

「今は、江戸川君なんでしょう?」

“今”はコナン。

いつからコナン?

頭の中がぐちゃぐちゃだ。

もし今工藤新一に戻れたなら、今でも蘭のもとに行くのだろうか、俺は。



「そっか、そうだな」

俺の勝手な自己完結に不思議そうな顔をする宮野志保。

俺はもう考えたくないのに、脳は勝手に理論づけていろいろなことを推測してしまうから。

ハッと何かを悟った途端、涙が溢れてくるのが分かった。  
とっさに右腕で目元を覆う。

「いめん…っ」

志保は、そんな俺を包みこむようにそっと抱き締めてくれた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5699a/>

---

証明、君。

2010年10月9日06時42分発行